

人生の遺失物

新田由紀子

年と共に注意力が失せて、忘れ物をする事が多くなった。傘など持って出ればどこかに置き忘れてくる。帽子、手袋もいくつ失くしたことが。方々の立ち寄り先に問い合わせて探すが、そのうち諦めて新しいものを買って落ち着く。失うのは物だけではない。見つける手立てもなく、心の奥で疼く失くした人々。いや、男女のことはさておき、心を通わせた親友を、なんと絶交を言い渡されて失った。もともと、人にあまり関心がない利己的な性格もあって愛想をつかされるのだろうが、人生の終盤に来てこれは寂しい。

中学時代のクラスメートは貴重な親友だった。社会人になっても交流が続き、興味や関心を同じくして誘い合っては出かけていた。相談事があると言われて夜遅くまで飲んだ時、私は何を言ってしまったのか。「そう思っていたなんてシヨック： もうあんたとは死ぬまで会わない」と。年を重ねて、立場や環境がかけ離れたとはいえ、長年の友情の地盤をひっくり返すようなことを口走ってしまったのかもしれない。

絶交難はもう一つ。趣味の山仲間の一人に、皆のいる前でこっぴどく罵られて「絶交ッ」を浴びた。何が悪かったのか身に覚えがないのが困る。彼女とは数年たってひょっこり山の頂上で出会った。互いにあっち、こっちと下山路を指さすと「じゃあ」と別れた。

さらに失った友人には事欠かない。旅先で出会って夜通し語り合い、意気投合した中国の秀才女性。東京に定住して地方の町起こし事業を始めたとかで、ラインを交わして現地での再会も期した。自分が踏み込まなかった人生の一端を担えるような展開を思い描いたのに、一年余りで連絡は途絶えた。

大学時代からの友人を失ったのも不意のことだ。同じシニアクラブで親しくしていたはずがなぜか疎遠になり、連絡しても返事をもらえない。プツリと切られてはなす術がない。

老いの時間を共に過ごすつもりだった人々。こんな人生の遺失物はどこで探し当てればいいのか。